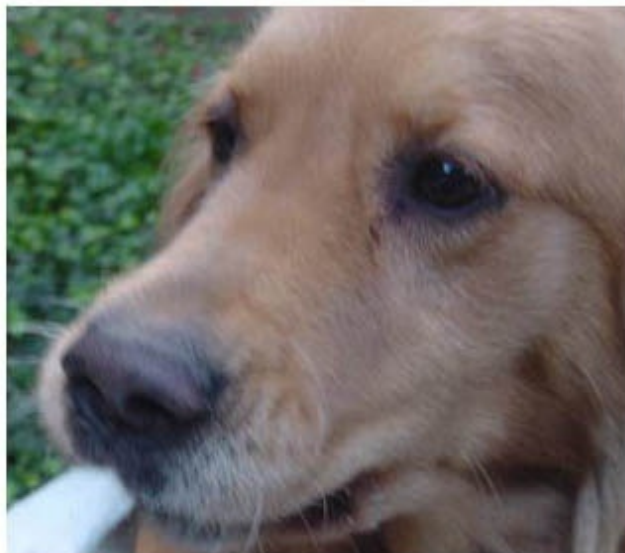


ほくと

カンタと大事件



story by aono

第一章

「わかったよ、カンタ。わかったから」

首の後ろにぬれた冷たいものがさわるのを感じて、ぼくはふとんを頭までかぶった。

「お願いだからもうすこし寝かせてくれよ。今日は日曜日だよ」

カンタには通じなかったみたいだ。冷たい鼻をグイグイとふとんの中に押し込んでくる。

ぼくはあきらめて顔を出した。ペロっとなま暖かい舌が耳のあたりをなめた。

「散歩に連れて行く約束よ」

ドアのところで、母さんが腰に手をあてて、にらんでいる。

「行かないなんて言ってないよ。もう少し待って、って言っただけだ」

「フフン」と母さんは鼻をならしたように、ぼくには思えた。

「もう、七時よ。早くしないと人でこんでくるわ」

カンタの散歩コースになっている公園のイベント広場は、放送センターに近い事もあり、日曜日には何かしら催しがあって混雑するのだ。

ベッドから急いで降りると、顔を洗ってダイニングキッチンをのぞいた。みそ汁の良いにおいがした。

「食べてから行くんでしょう？ おかずはハムと卵くらいしかないわよ」

さすが母さん、食べなかったら飢え死にしちゃうよ、ぼく。

「姉さんは？」

「まだ寝てるわよ」

「ずるーい」

「何がずるいの。由美はお気楽なあんたと違って、高三なのよ」

「ぼくだって、小学五年だよ。姉さんの学校、大学まであるじゃん」

「進学のためのテストはあるのよ。今の成績じゃ、がんばらないと希望する学部へ行けないんだって」

「ふーん、姉さんもそれなりに大変なんだ」

「誰が大変なの？」

姉さんが伸びをしながら、向い側の椅子にすわった。

「なんでもなーい」

ぼくは最後のハムを口の中に押しこむと、急いでテーブルをはなれた。

カンタが後ろからついてくる。

玄関で靴をはいていると、ハムとパンの焼けるいいにおいがただよってきた。

姉さんは父さんと同じで、朝食はパンだ。

あんなものでよく足りるよ、ぼくなんかご飯を食べなきゃお昼までもたない。

なんたって、「そんなに食べると肥満児になるわよ」と母さんに言われている体型だ。今はまだ太っていないけど、年のわりには大きい方だと思う。

よだれを出して、ダイニングキッチンへ戻ろうとするカンタにリード（引き綱）をつけると、ひっぱるようにして外に連れ出した。においが気になるのか、カンタはしきりに後ろをふりかえる。

十月の空気は冷たくて気持ちがいい。日曜日の朝は人通りもなくシーンとしている。

ぼくはかけ足で公園への坂を上った。周りには人影がなかったので、おもいきりリードを長くした。カンタのリードはリール式で、短くも長くもなる。最長五メートルだ。

カンタは鼻を生け垣の中に突っこむと、フンフンとにおいをかぎ、足を広げておしっこをするんだ。まだ成犬のように、ちゃんと片足をあげておしっこはできない。

そうかと思うと街路樹の根元にウンチの置きみやげをする。小さなシャベルでそれをすくいあげ、ビニールの袋に入れる。これさえなければ、散歩は楽しいけどね。

寄り道が多いので、ぼくが公園近くの信号まで着いた時カンタは五メートル後ろだった。リードがピンとのびきって、これ以上のびる余地はなかった。

「カンタ、早く来い」

首をこっちに回しただけで、カンタはしきりに何かのにおいをかいでいる。しかたないのでぼくはそこまで戻った。

放送局と区の公会堂の間の地下には広い駐車場がある。歩道にある階段が駐車場の出入り口となっている。カンタが立ち止まっているのは、階段わきの塀のそばに開いて立てかけられている傘の所で、いつも体を傘で隠すように寝そべっている小柄なホームレスのおじいさんがいる。難しそうな本を読んでいる事が多い。きむずかしそうに見えるから、ぼくは何となくさけて通る事にしている。

カンタはおかまいなしに黒いビニールの傘に鼻をくっつけて臭いをかいでいる。

「すみません」

ぼくは小さい声で言った。

おじいさんは手を伸ばしてカンタの頭をなでるとにっこりと笑った。眼鏡の奥の眼はとても優しかった。

汚れたグレーの背広を着て、黒い革靴をはき、分厚い本を枕がわりにしているおじいさんを、ぼくはひそかに『学者さん』と呼んでいた。

「なんて言う犬？」

「カンタ」

「それは知っているよ。いつも君が大声で呼んでいるから」 『学者さん』はおかしそうに言った。ぼくは顔が赤くなった。

「犬の種類を聞いたんだ」

「ゴールデン・レトリバー」

「成犬かい？」

「六ヶ月。まだ子犬なんです」

『学者さん』はもう一度カンタの頭をなでると、また本を読みはじめた。

「カンタ、行くぞ」

今度はカンタもおとなしくついてきた。

どう考えてもおかしいよなあ。グレーの背広に黒の革靴、むずかしそうな本、ホームレスには珍しい。「カンタ、行くぞ」

公園の広場には落ち葉が一面に広がっていた。

カンタはあちこちの落ち葉のふきだまりに行っては、おしっこをひっかけている。

遠くに足の短い茶色の犬が、草のにおいを嗅いでいるのが見えた。コーギーのチェリーだ。あの犬は苦手だ。

カンタのお尻をかぎまわるくせに、カンタがかごうとすると鼻にしわをよせてウーッとうなるのだ。

カンタをつかまえてリードにつなごうとしたが遅かった。もうチェリーの方へ一目散にかけていく。あんなにきらわれているのに、プライドってものはないのかよ、とぼくは思った。



飼い主の佳織さんがあわてて抱き上げた。

ふとっちょのチェリーは重そうだ。それでもしっかりとかがえている佳織さんの腕の中で歯をむいている。

カンタはチェリーを見上げてしっぽをふっている。

「カンタくん、今日は土手の方へ行かないほうがいいわよ。変な男の人がいるから」

ぼくはカンタくんではないが答えた。

「ホームレスの人ですか？」

「そうだと思うけど。こわそうな人よ」

「気をつけます」

土手というのは、近くのJRの駅から幹線道路へとつながる広い通りに面した高台で、朝や夕方には十頭以上の犬が集まる。また飼い主達の情報の交換の場でもあるらしい。

ぼくは参加させてもらえないけれど、母さんや姉さんはけっこう楽しんでいるようだ。

この公園にはホームレスも多く、顔なじみになった人だけでもかなりいるし、そのひとりひとりにぼくはひそかにあだ名をつけていた。

ぼさぼさの長髪に長いひげ、いつも花壇のふちであぐらをかいて座っているホームレスは『教祖』だ。

カンタに声をかけるわけでもなく、ぼくをちらっと横目で見るとはちょっとこわそうだけど、カンタがそばにいくとたまにおやつをくれる。母さんには叱られるから内緒だ。

「外で食べ物をもらってははいけません」といつも言われている。

でもさ、カンタがよだれを出してそばに座ったら、落ち着いて食べてもらえないよね。それにぼくもことわる事なんてできない、カンタの気持ちもわかるから。

チェリーとわかれて広場まで走って行った。

早朝のせいか誰もいない。カンタのリードを外すと、ジャンパーのポケットからテニスボールを取り出して遠くへ放り投げた。

「カンタ、取ってこい」

何回か放り投げていると、ボールはカンタのよだれでべとべとになる。草にこすりつけてきれいにした後、ポケットにしまった。

佳織さんにはああ言われたけど、こわいもの見たさもあって、土手に行ってみる事にした。

いた！

黒い服に黒いマント！

背が高くて、あれで顔にキズがあればブラック・ジャックだ、ちょっと汚いけど。

男は通りの向こうがわにも広がっている公園をじっと見つめていた。

視線の先にはいくつもの青いビニールテントがフェンスに沿って並んでいる。

カンタがそばに近付くと足をあげてけとばした。

「キャン、キャン」カンタはおどろいて飛び退いた。まだけとばされた経験はない。ぼくはそうそうに退散する事にした。

ぼくは心の中で『ブラック・マント』とあだ名をつけた。

『ブラック・ジャック』じゃ名前がもったいない。

「姉さーん。ニュース、ニュース」ぼくは家のドアを開けながらさげんだ。

「そうぞうしいわね。一体どうしたの？」

姉さんは二階の自分の部屋から降りてくると、「カンタ、お帰り」と、ぼくには決してださなような優しい声でカンタを迎えた。汚れた足が床につかないように抱き上げると、お風呂場に連れて行った。

「土手のところにさ、変な男がいたんだ。ブラック・ジャックみたいになかっこうして、こわそうな人」ぼくは早速報告した。

「知ってる、知ってる」カンタの足を念入りに洗いながら、姉さんはぼくの顔を見た。

「黒い服に、黒いマント着た人でしょう？ 駅前の地下の商店街でよく見かけるわよ」

「そこから移ってきたのかな」

「わからないけど、あまり近寄らないほうがいいわ」

「近寄れないよ。犬がきらいらしいもの。カンタだってけとばされたんだから」

「なんですって？」突然、ぼくの頭の上で声がした。母さんがいつのまにか後ろに立っていた。

「カンタをけとばしたの？ ホームレスが？」

母さんはカンタの事となるとすぐカッとなる。

「警察に取り締まってもらわないと」

「そんなことを警察に言ったら、なぜ公園で犬を放したのかと、反対に怒られるよ」

「そうじゃないわよ。ホームレスを何とかして欲しいって言うの」

母さんの怒りはおさまらない。

「だめだよ。中にはカンタを可愛がってくれる人もいっぱいいるんだから」

「そうよ、悪い事している訳じゃないし。ママは本当に単純なんだから」姉さんが加勢してくれた。

「公園がホームレスに占領されるのは良い事じゃないわ」母さんはまだ主張している。

「公園が犬に占領されるのは良い事じゃないと誰かが言っているかもしれないよ」

今度は後ろから父さんの声がした。

母さんは振り返って父さんをにらむと、「朝食、作ってあげませんよ」と捨てぜりふを残してキッチンへ行ってしまった。

パジャマ姿の父さんは、ぼくにウインクをした。

「起きたの？ 父さん」

「うるさくて寝られないよ」

「ごめんなさい」ぼくはあやまった。

「パパもそろそろ起きてもいい時間よ」姉さんが横から口を出した。

「そうだな、そろそろ顔でも洗うか」

父さんは姉さんに何を言われてもうれしそうな顔をする。大体、姉さんに甘すぎるんだ。姉さんが叱られるのをぼくは見た事がない。

第二章

月曜日から金曜日までのカンタの散歩は母さんと姉さんとで担当している。

ぼくの当番は土曜日と日曜日だ。だからぼくは一週間、公園には行かなかった。

姉さん達の話によると『ブラック・マント』をもう見かけないそうだ。

よかった、ひと安心だ。

土曜日の夕方は人通りが多い。ぼくはカンタのリードを短くして、ゆっくりと坂をのぼっていた。

いつもの花壇の所に『教祖』の姿が見えない。今日は混雑しているから別の所へ移動したのかも知れない。

広場ではどこかの県の物産展が開催されていて、テントがぎっしりとはりめぐらされている。民芸品や特産物が売られ、人気のあるテントには何重にも人が取り巻いていて、何を売っているのか分からないほどだ。

その中のひとつでは、どうやら肉を焼いているらしい。

カンタの鼻がヒクヒク動き、鼻にひっぱられるようにして、首がおいしそうなおいの流れてくる方向にぐっと伸びた。ぼくはリードを強く引いてあわててその場を離れた。

よだれまでたらされたら恥ずかしいよ。しょうがない、今日は別の公園に行こう。

ぼく達は土手を飛び下りて、交差点にある交番のお巡りさんにあいさつをすると二つの大きな通りにはさまれた住宅街へ向かった。

この地域には、大使館や美術館、有名人の家がたくさんある。一方通行の道も多く、自動車はあまり入ってこない。歩きやすいせいか、このあたりを散歩している犬はかなりいる。

顔見知りや、友好的な犬と互いにあいさつをしながら歩いていると、前方から短足の茶色いかたまりがやってくる。

チェリーだ。

道を変えようと思ったけど、カンタはグイグイとチェリーの方へ向かってリードをひっぱって行く。

ぼくはチェリーと反対側を、なるべくリードを短く持って通り過ぎようとした。今日のチェリーは佳織さんのお父さんと一緒だ。カンタを見つけると顔をこっちに向けてウーッとうなった。

「チェリー！」飼い主の鋭い声がした。

チェリーは大きな耳をさっと後ろに伏せて、今度はカンタに目もくれず、飼い主に従った。

「ヒュー」ぼくは思わず口笛を吹いた。

「カンタ、お前もあのくらいちゃんとぼくの命令を聞くんだぞ」

カンタは知らん顔をしている。

日も暮れてきたので、住宅街のまん中にある公園へ足を向けた。そろそろ小さい子どもたちも家に帰っている時間だから、すいているに違いない。そう思っていたのに、入り口の所に人だかりがしている。

「何かあったんですか？」ぼくはそばにいた男の人に聞いてみた。

「うん？」

男の人はぼくをみると、子供だと思ったのか「あっちへ行きなさい」と言った。

「カンタくん？」と呼ぶ声にふりかえると、ポメラニアンのスーちゃんを抱いたおばさんの顔があった。公園の犬仲間のひとりだ。

「公園の池のね、アヒルが殺されたらしいのよ。だから近付かないほうがいいわ」

「アヒルが？」ぼくはおどろいて聞き返した。

「警察で調べているみたい。ひどい事をするわね」

おばさんはスーちゃんをぐっと抱きしめると、首をふりながら帰って行った。

まったくいやな事件だった。

池のアヒルは人なつこくて、人間を見ても逃げ出したりしない。みんなが餌をなげいれるせいか、池のふちに立っただけでそばに寄って来る。池の水面をゆうゆうと泳ぐあいぎょうのある姿は、見ていて飽きない。

一体だれが？

色々な人の話に聞き耳をたてて集めた情報によると、アヒルはほとんど全滅だったそう。一羽だけ助かったらしいが、残りはすべて首の骨を折られて池のそばに捨てられていたと言う。ぼくは気持ち悪くなってきた。カンタのリードを引くと、家へ向かって走り出した。



月曜日の朝ぼくが学校へ行くと、パトカーが校庭に止まっていた。その周りを生徒たちが取り囲んでいて、先生が教室へ入りなさいと大声を出している。

「おい、何かあったぞ」

ぼくは一緒に登校している同級生の雄二にささやいた。

「見に行こう」二人で走り出した。

「教室に入れー」頭上から太くてかすれた声が降ってきた。担任のゴリラだ。毛深くて、体も大きい。

「先生、なんかあったんですか？」雄二が聞いた。

雄二は優等生だ。こういう時には強い。ぼくなんかが聞いたら『よけいな事聞くな』と怒鳴られそうだ。

「にわとり小屋に何か入り込んだらしい」

「にわとり、殺されたのかな」ぼくはつぶやいた。

「何でそう思うんだ？」ゴリラが聞き咎めた。

「だって、土曜日に家の近くの公園でアヒルが殺されたから……」

ゴリラはじっとぼくを見ると、「本当か？」とたずねた。

「ぼく、見たわけじゃないけど。近所のおばさんがそう言ってたし……」

ゴリラは考え込むように腕を組んだ。

「ともかく、教室へ入りなさい」

ぼく達はにわとり小屋に行きたかったが、あきらめて教室へ向かった。教室ではみんな興奮していて騒がしかった。兎が殺されたというもの、花壇が荒らされたというもの、いや、にわとり小屋がめっちゃめっちゃにこわされたと言うもの、さまざまだ。

朝礼の時、ゴリラは事件の説明をしてくれた。

土曜か日曜に、誰かがにわとり小屋に犬を入れたらしい。にわとりは犬に噛まれたか、逃げようとしてフェンスに突進したはずみに首を折ってみんな死んでしまった。

今朝早く用務員さんが発見したが、幸いまだ登校時間の前だったので、下級生は死んだにわとりを見ていないそうだ。今、警察が捜査中だ。にわとり小屋はもう掃除がすんできれいになっている。世話をしていた三年生たちはショックを受けて泣き出してしまった子もいる、などなど。

ぼくはなぜかアヒルの事件が思い出されてならなかった。

その日、一日中ぼくは授業がうわの空だった。ぼくばかりではないかも知れない。頭の中でアヒルとにわとりとがごっちゃになって行き来していた。もっとも今までだって授業に熱心だった事なんてないんだけどね。

放課後、ぼくはにわとり小屋に寄ってみた。雄二は塾があるからとすぐ帰ってしまった。

ゴリラが言った通り、もう小屋はきれいに掃除されていて、目に入ったのはフェンスに残った二、三枚の羽だけだった。

「まだ帰らないのか」ゴリラの声がした。

「ちょっと、気になったから」ぼくは口の中でもぞもぞと言った。先生は苦手だ。雄二のように勉強が出来るわけではないから、なるべく先生とは離れていたい。

「朝の話だが、アヒルの事もう少し聞かせてくれないか」

「ほかには何も知りません」

にわとり小屋に来なければよかった。ぼくは後悔した。

「別に叱るわけではないんだから、そんなにこわがらないでくれ」

「……」

「実はな、他の学校で兎がおそわれる事件があって、どこでも困っているんだ」

「他の学校でも？」おどろいて聞き返した。

「ああ、この辺りの学校ではたてつづけにやられてね。参考になるかも知れないから聞きたいんだ。答えてくれるね」

ぼくはうなずいた。

「お前が公園に行ったところから聞こうか」ゴリラがうながした。

ぼくは土曜日の夕方からのことを、人から聞いた話もふくめて全て話した。ゴリラはぼくのどぎれどぎれの話、校舎へ入るコンクリートの階段に座って黙って聞いていた。

ぼくの話しが終わるとゆっくりと立ち上がり、「ありがとう、参考になったよ」と言った。

なぜこんな話が参考になるのかちっともわからない。

「犬の散歩の途中だったと、さっき言ってたね」ゴリラが思い出したように付け加えた。

「そうです、カンタの散歩をしていたとき……」

「カンタという名前か。犬種は何だ？」

「ゴールデン・レトリバー」ぼくは少し誇らしげに答えた。

「そうか、おとなしい種類だね」

「先生の所も飼ってるの？」

「ああ、息子にせがまれてね、ボクサーを飼っている」ゴリラの顔が少しゆるんだ。

「だが、犬を甘やかし過ぎてね、少々もてあましぎみだ」

別に理由はないけれど、突然ゴリラに親しみを感じた。

「ところでお前、塾には行っていないのか？」突然聞かれてぼくはびっくりした。

「行ってます」

「今日はいいのか？」

「日曜の午後だけだから」

「そうか日曜テストか」

「はい」

「そっちの成績はどうだ？」

ぼくは黙って下をむいた。成績のことは一番よく知っているじゃないか。

「お前は、算数はできるからな。ま、がんばれよ」

ゴリラはそう言って離れていった。

にわとり事件は新聞の地方版にもどり、父母の間でもけっこう話題になったらしい。

いつもは学校に無関心な母さんでさえ、夕食の話題にしていた。食事時の話題とは思えないけど、母さんは無神経な人だから。

「そんな話、食事中はやめたら？」姉さんに注意されて母さんは言い返した。

「食事の時に話すなって言うのだったら、一体いつ話したらいいの？他に顔をあわせる時なんかないじゃない」

ぼくはいつも顔を合わせているんだけど、数のうちに入っていないらしい。父さんはそう言う時は会話を聞いていない顔をする。どっちに味方しても後がこわいと、ひそかにぼくに教えてくれた。

一週間もたつと、アヒルの事にもわたりの事もほとんど話題にのぼらなくなり、やがてみんな忘れてしまったようだ。

姉さんは試験が終わったとかで遊びまくっている。

「もう試験ないの？」ぼくが聞くと姉さんは歌うように答えた。

「来年の一月までないのよ。それも簡単なテストだけ」

「行く学部決まったの？」

「内定だけどね。よっぽどのことがなければだいじょうぶ」

「よっぽどのことって？」

「学校で禁止されている事をやってたとか、警察に補導されたとか」

「姉さんやっていない？」

「私はそんなヘマはいたしません」

そう、姉さんはヘマをしない。要領いいもの。ぼくのことをいつも嘆いている。

「どうしてそんなに要領悪いのかしら。もう少し何とかならないの？」

でもそんな時、父さんは言ってくれる。

「いいんだよ、お前はお前。そこが良いところなんだから」

第三章

事件から一月半程たった十一月のある日、カンタの体調が悪いのに母さんが気がついた。

「おかしいのよ、散歩に行ってもすぐ帰りがるし」

「そう言えば、草をよく食べているわ」姉さんが続けた。

「この間、草と一緒につばをはいてたよ」

二、三日前の事を思い出して、ぼくは報告した。

「どこか悪いんじゃないかしら。由美、岩本先生のところへ連れてってちょうだい」

「ぼくも一緒に行く」

「そうね、多少は役にたつでしょう」母さんの一言で決った。

ぼくと姉さんは歩いて二、三分の所にある『岩本動物病院』へカンタを連れて行った。岩本先生は若いけど腕がいいので評判の獣医さんだ。カンタはけっこう重いから、近所じゃなければ父さんに車で行ってもらうしかない。

病院のドアを開けると、先客がいた。コーギーのチェリーだ。いつもはチェリーのそばにとんで行くカンタが、今日は病院の床にぺたッとお腹をつけて寝そべってしまった。

「カンタくん、具合悪いの？」チェリーを連れている佳織さんが聞いた。

佳織さんと姉さんは同じくらいの年令で話が合うらしい。

「そうなの、元気がなくて。チェリーは？」

「チェリーはいつもように耳のおそうじに来たのよ。耳が大きいから細菌が入りやすいんですけど」

チェリーは由美姉さんにしっぽをふってあいきょうをふりまいている。姉さんもチェリーの頭をなでながら、「チェリーはかわいいわねえ」とにっこり笑った。

とんでもない、かわいくなんかあるものか。カンタを見ると鼻にしわを寄せてフーッとうなるくせに。

でも、今はカンタには目もくれず姉さんに飛びついている。

行儀悪いぜ、チェリー。

二人がおしゃべりを始めたので、ぼくはカンタのそばにかがんで背中をなでてやっていた。姉さんは片手でチェリーをかまいながら話に夢中だ。

チェリーが呼ばれて診察室に入っていった。

佳織さんの声が聞こえる。

「チェリー、そんなにふるえないで。だいじょうぶよ」

弱虫チェリーめ。

やがて、甘えるような、訴えるような声がきこえてきた。あんな声も出せるんだ、ぼくはウーッとうなる声と、フーッといかくする声しか聞いたことがない。

「カンタくん」と呼ばれてぼく達の番になった。

姉さんとぼく二人がかりで、やっとカンタを診察台にのせた。カンタはぐったりしている。

チェリーは出口から出て行ったらしく、もう姿がみえなかった。

ここは入り口と出口が別で、犬同士が鉢合わせしないようにできている。

「何か変なものを食べませんでしたか」岩本先生はカンタを診察しながら聞いた。

「特に、思い当たることはありませんけど」姉さんが答える。

「散歩の途中で拾って食べることは？」

「さあ、ないと思います」姉さんはぼくの顔を見た。

「そんなことしないと思うよ。でも、カンタは食いしんぼだから」

「食いしんぼは、おまえでしょ」姉さんはぼくをにらみつけた。

ぼくはだまった。

「何か悪いものを食べたようだよ。今日は注射をしておくから、薬は一日一回、食事の時に飲ませてね」

「食べ物は何をあげたらいいんでしょう」

「ドッグフードはやめてください。牛のひき肉をナマで」

「牛のひき肉をナマで、ですか？」姉さんがびっくりしたような声で聞いた。

「もともと犬は肉食なんだから、牛のナマ肉が消化しやすいんだよ。それから、もし吐いたりしたら、そこはよく消毒してね」

牛肉だって？

カンタ、すごいごちそうじゃないか。ぼくがお腹こわしたらおかゆだよ。

「しばらく注射に通って下さい」先生にそう言われてぼくと姉さんは顔を見合わせた。ぐったりしたカンタを毎日運んで来るのは大変だと、姉さんもぼくも思ったんだ。

「大丈夫だよ、明日には歩けるようになるから」先生はぼく達の心をみすかしたように言った。

カンタを毎日病院へ連れて行く役はぼくになった。姉さんはいろいろ予定があって忙しいそう。ぼくは別に何も忙しくない。カンタの事もとても心配だし、言われなくたって連れて行くさ。

毎日病院へ通ったおかげで、ぼくは岩本先生と仲良くなった。もともと大人と話すのはとても苦手だ。学校の先生ともろくに話をしないぼくにとって、カンタの具合を話さなければならないことは、最初とても苦痛だった。

でも何回も通っているうちに、だんだんと楽しみになってきた。自分でもびっくりしたけど、雑談だっけするようになった。他に待っている犬のいない夕方、先生もひまそうで、ぼく達はのんびりとおしゃべりをした。

「来年は六年生なのか。大変だね」

「大変じゃないよ、別に」

「六年ともなれば、勉強しなくちゃいけないだろう？」

「どうして？ ぼく受験しないもの」

受験するのはクラスの半分くらいだ。遊び相手もまだいる。

「先生はどここの中学？」

「神奈川県の田舎の方だよ」

「神奈川県は、田舎じゃないでしょう？」

「何と説明したらいいのかな。先生の子供の頃はまだ自然が多くて、いいところだった。果物もたくさんとれてね。秋になると柿や梨があちこちの家でなっていたよ。農家も多かったからね」

「先生の家も農家だったの？」

「いや、サラリーマンの家庭さ」

「どうして獣医さんになろうと思ったの？」

「うーん」と先生は少し迷ったようだった。待合室をのぞいて誰もいないの確かめると「それはね」と話しはじめた。



第四章

<岩本先生の話>

僕がまだ小学生だったころ、そうだね、小学三年のころだったかな。さっき話したような田舎だから学校の校庭はとても広く、野球もサッカーも盛んだったよ。

僕は野球が好きで、少年野球のチームには入っていた。外野を守っていたって言うと格好いいけど、実際のところたまひろいだね。上級生が内野で、下級生は外野。そんな時代だったな。

それでも、僕達は野球が大好きで、放課後、学校の校庭や空き地に集まっては野球をして遊んでいた。

ある日、いつものようにみんなで集まって試合をしていたんだ。小学生のそれもじょうずとは言えない野球の試合で、外野まで球が飛んでくることはほとんどない。僕はただそこにたっているだけなので、だんだん退屈になってきた。

ちゃんとしたチームではないから、監督はいないし、もちろんグラウンドもただの空き地だ。外野のあたりは草むらで、僕は虫を捕まえるのに夢中になってしまった。

虫とりに熱中しても誰も気にしない。もちろん外野まで球が飛んでくるような事があれば上級生も気がついたらろうね。僕は知らないうちにだんだんグラウンドから遠ざかっていた。

「キューン、キューン」という声におどろいてあたりをみまわすと、子犬がつつじの木の根元でうずくまっていた。おなかがすいていたのだろう、僕の顔を見てまた「くーん」となくんだ。

「こんなところに犬がいる」僕は大声でさげんだ。

上級生達もみんな集まってきた。

六年生でリーダーの剛が子犬をそっと抱き上げた。

「腹すかしているみたいだ。誰か食べ物持ってこい」何人かの生徒が家へ走って行った。

食べ物があるあいだ、僕達は子犬をかわるがわるなでながら、これからどうするか相談した。

「誰か家で飼えるやついないか」剛がみんなの顔を見回した。

「僕んち、もう犬いるから二匹はダメだよ」

「団地だから無理だ。禁止されてるんだ」

「かあちゃん、犬きらいだから」

それぞれに飼えない理由を述べたあと、僕達はみんな黙り込んでしまった。しばらくすると、食べ物をとりにいった五年生の良夫と敦史が牛乳とクッキーとお皿を持って戻ってきた。小さなお皿に牛乳を入れると子犬の前においた。僕達下級生は後ろのほうからのぞきこんだ。

『ピチャ、ピチャ』 子犬は音をたてて牛乳をなめている。あっという間に空になったお皿に、今度は剛がクッキーをくだいて入れた。子犬は鼻をクッキーにくっつけてにおいをかいだ後、少しずつ食べはじめた。

「ここに放っておくわけにはいかない」剛が断固とした調子で宣言した。みんな黙ってうなずいた。

「しかし、誰も飼うことはできない」僕達はまたうなずいた。

「どうすればいいか」

しばらくの間、僕達は車座になって考えた。子犬は、クッキーを食べ終わり、ちいさなしっぽをぴよこぴよことふっていた。誰も何も言わなかった。

「みんなで飼おう」突然、剛が思いついたように声をあげた。

「ここに犬小屋作ってやってさ、みんな交代で食べ物をもってくればいい」

それは僕達にとって、とてもすばらしい案に思えた。

「まず、名前をつけよう」剛が提案した。

「なんて言う名がいいかなー」

「たぬきに似てるから、ポントは？」

「そうだな、こいつには丁度いいかもしれない」

全員が子犬の顔をながめた。目の周りがまるく黒くなっていてあいきょうがある。言われてみると確かにたぬきに似ていた。

いろいろと名前の候補があがったけど、結局ポントという名前がその子犬に与えられた。

段ボールで犬小屋をつくり、誰かが古いタオルを持ってきた。その日はもう、野球どころではなかった。剛がマジックインキで『ポントの家』と書いて、みんな大満足だった。

僕達が子犬を見つけたのは九月の始めで、夏休み気分がまだぬけないころだった。今のように塾に行っている子はほとんどいない、のんびりした時代だったよ。

しばらくはものめずらしさもあって、朝、学校に行く前や放課後に、みんな食べ物を持って行ったり、飲む水がなくならないように気をつけたりしていた。

ポントは少しずつ大きくなって、帰ろうとするとかなり遠くまで僕達を追いかけてくるようになった。

野球のボールをくわえて持っていってしまったり、かじって使い物にならなくなったり、結構いたずらをするので、本当の所、僕達は世話が面倒くさくなってきたんだね。だんだんと食べ物を持って行く回数が減り、水をやらなかったりすることが多くなってきた。

幸い、雨の多い季節だったからポントは自分で何とかしていたのだろう、雨水を飲んだり、ゴミ箱をあさったりしてね。子犬とはいえ、やはり野良犬だから警戒心が強く、大人の人間には近寄らなかつた。

あれはポントを見つけてから二ヶ月くらいたった頃だったかな、秋の運動会にむけて空き地を整備することになったんだ。整備といっても、草むしりをしたり、石を拾ったりするくらいだが僕達はとても困った。ポントの小屋が見つかってしまう、何処かに移さなければ、とね。

とにかくほかの所へと、まずポンタにひもをつけて別の公園へ連れて行くことにした。みんなでひもを交代で持って、飼い犬を散歩させている気分だった。

公園につくと、ひもをつけたままポンタを放して、僕達はドッジボールをはじめた。最初のうちは、ひもを引きずって一緒になってボールを追いかけていたポンタの姿が、いつの間にか見えなくなっていたのにだれも気がつかなかった。

そのころ、僕の町では正午と夕方六時にチャイムが地域全体に聞こえるように鳴っていた。今はどうなっているか分からないけどね。チャイムを合図にみんな家へ帰るように、どの家庭でも子供達に言い渡していた。

そのチャイムが公園にひびき渡った。

「また明日ね」

「ばいばーい」

「明日遊ぼうねー」

口々に言いながらぼく達は走ってそれぞれの家に帰った。みんな、ポンタのことはすっかり忘れてしまっていた。

次の日の放課後、学校の焼却炉のそばに『ポンタの家』と書かれたダンボールを発見した僕達は、ポンタを公園に置き去りにしたのを思い出した。あわてて全員で公園にポンタを探しに駆け出した。

「ポンター」

「どこにいるんだー」

口々に呼んでもポンタは出てこなかった。手分けして公園内を捜しまわった。

「どこかいったんだ」

「僕達がきらいになったのかなー」

「ひもをつけてたから、誰かが連れて行ったのかも知れない」

ポンタはいた。

つつじの木の根もとに横になって、ピクリとも動かなかった。

「いた！」僕は大声をだした。

「どこだ？」剛がよってきた。

僕はポンタを指さした。「死んでる……」剛の声はふるえていた。

「うそだ！」僕はさげんだ。

「死んでる、動かないもの」今度はしっかりとした声で剛が言った。

全員が集まってきた。みんな心配そうな、おどろいたような顔をしている。

僕がポンタにさわろうと手をのばした時、

「さわってはだめだ。どんなばい菌がいるか分からないからね」と大人の声が聞こえた。

公園に散歩に来ていたおじいさんだった。

「保健所に電話してくるから、絶対にさわらんじゃないよ」

僕達はしゃがんでポンタをみつめていた。みんな泣いていた。わかっていた、僕達の不注意から、ポンタが死んでしまった。僕達のせいなんだ。

つつじの木の間を走り回っているうちに枝にひもがからまり、パニックになったポンタがあばれた為に、ひもがポンタの首をしめてしまったんだ。

僕が最初に出会って、僕がその最期を発見したポンタ。（ごめんよー。ごめんよー。ひもなんかつけなければよかった）僕は心の中で何回もポンタにあやまった。

その時からかな、大人になったら動物を助ける仕事をしたいと思うようになったのは。ポンタにつぐないをする意味でもね。

* * * * *

ドアが開いて、髪の毛を茶色に染めた中学生くらいの少年がシェパードを連れて入ってきた。「リュウじゃないか。どうしたんだい？」岩本先生の言葉で思い出した。雄二の兄さんの順一君だった。

「こんちわ、先生。ちょっと寄っていただけです。診療中でしたか？」

「いや、雑談をしていただけだ。リュウは元気かな？」

「バッチリですよ」順一君はそう答えると、ぼくの方をちらっと見た。

「雄二の友だちだったか？」

順一君にそう聞かれてぼくはうなずいた。

ぼくの足元に寝そべっていたカンタは起き上がった。

シェパードのリュウは伏せの姿勢で順一君のそばに控えている。カンタには目もくれない。こんなに近くで見たのははじめてだ。毛並がつやつやとしているが、カンタの毛より固そうだ。

ちょっとさわってみたい。

（リュウにさわってもいい？）その言葉が言えなくて、ぼくはもじもじとしていた。

「じゃ、俺、帰るから」先生にそう言うとリュウを従えて順一君は出て行った。

ぼくは機会をのがしてしまった。

第五章

公園のいちょうの葉が黄色くなってきた頃には、カンタも体調をすっかり取り戻した。

ぼくは相変わらず土曜日と日曜日にカンタの散歩に行っている。カンタはますます大きくなった。運動不足にならないよう最低一時間は連れ出している。

日曜の早朝いつものように坂を上って行くと、黒い傘がない。駐車場へ下りて行く階段をのぞいてみたがそこにも誰もいない。『学者さん』の姿が消えていた。

不思議に思ったけど「ホームレスは冬には地下街に移動するのよ」という姉さんの言葉を思い出して、きっと外はもう寒くなったんだな、と納得した。

風邪をひかないと良いんだけど。一回しか話したことのない『学者さん』にぼくはなんとなく親しみを感じていた。広場では相変わらずコーギーのチェリーが鳩を追いかけていた。カンタがまた駆け寄ろうとしたので、ぼくは「カンタ、トマレ」と命令した。カンタはぴたりと立ち止まった。

そう、カンタは訓練を受けているんだ。お年寄りや、小さい子供にカンタがとびついたら大変と、母さんは訓練センターに通っている。ぼくは体のわりに力も強いし握力もある方だ。でも急にカンタが走り出したら止められない。訓練の成果か、このごろ困ることは何もない。

土手の所でリードを外してカンタを自由にしてやった。今日はめずらしく土手に犬も人もいない。カンタはあちこちのかんぼくのしげみに入り込んで体を地面にこすりつけている。大きな体で両足を上にあげ、背中をこすっている姿はとても格好いいとは言えない。

以前、何か腐ったようなにおいを体中から発散させて父さんと散歩から帰って来たことがある。母さんは急いでカンタを風呂場に連れて行くと洗い始めた。カンタの姿が泡で隠れてしまう程シャンプーを使った。その時つけていた首輪とリードはどうやらゴミ箱に行ったらしい。「そう言えば、仰向けになって放心状態で体を地面にこすりつけていたな。あれはにおいを体につけていたんだね。

カンタにとっては素晴らしく良いにおいだったんじゃないのかな」と、父さんは説明していたけど、母さんは返事もせず顔をしかめてカンタをごしごし洗っていた。

相変わらずしげみに鼻を突っ込んでいるカンタは放っておいて、前にホームレスの『ブラック・マント』がやっていたように、通りの向かう側の公園をながめた。青いビニールテントが柵にそっていくつも並んでいる。あそこにどのくらいの人が住んでいるんだろう。これから冬になるのに寒くないのかな。

突然何かでお尻をつつかれたような気がし。振り向くと、カンタが口に何かをくわえて見上げていた。

ナイフ？

刃の所が茶色くよごれている。おどろいてカンタから取り上げようとしてやめた。

変な予感がしたんだ。ぼくは転げるように土手を下りると、交差点の角にある交番に駆け込んだ。カンタもナイフをくわえたままついてくる。

「どうしたんだい？」お巡りさんが声をかけてきた。

ぼくは息切れがしてまだ口がきけなかった。

お巡りさんはカンタが口にくわえているのを見ると、「それ、どうしたの？」と聞いた。

「カンタが、ぼくの犬がしげみの中で見つけたんです」それだけ言うのが精一杯だった。

お巡りさんはハンカチを取り出すとカンタの口からナイフを外し、机の上にそっと置いた。ぼくを椅子に腰かけさせて「家はどこ？」と尋ねた。

交番からの連絡を受けて父さんがぼくを迎えに来た。電話で起こされたらしく、髪の毛はぼさぼさで、サンダルをひっかけている。

お巡りさんにあいさつをすると、ぼくの方へ顔を向けた。

「だいじょうぶか？」

ぼくは少しぼーっとしていたらしい。父さんの声が遠くから聞こえた。

「カンタはナイフをどこから持って来た？」

「土手のしげみの所」

「はっきりわかるか？」

ぼくは首を横に振った。その時パトカーで刑事さんが到着した。ぼく達はカンタを連れて土手へ向かった。どこからナイフ持って来たか探すためだ。ぼくはカンタが背中をこすりつけていたかんぼくのしげみを指さした。

「あそこなんだけど」

「ナイフはどこにあったかわかるか？」父さんが聞いた。

「ぼく、見てなかった。公園のほうながめていたから、カンタがぼくのお尻を鼻でつつくまで気がつかなかった」

そのあと、刑事さんがいろいろ聞いたけど、ぼくに答えられる事はあまりなかった。

家へ帰る途中、父さんに聞いてみた。

「あのナイフ、大事なもののなの？」

「そうだな……」父さんは少し考え込んだ。

「警察の話だと、公園で事件があったらしい。それに関係あるようだよ」

「また事件？」

「また？」父さんがいぶかしそうな声を出した。

「アヒルとにわたりの事件、あったでしょう？」

「ああ、そうだったな。でも、もっと大変な事件らしいよ」

「どんな？」

「家へ帰ってからゆっくり話してあげるよ。刑事さんが新聞にも載っているといっていたから、見てみよう」

『公園に他殺体』

十一月×日午後五時頃、都内の公園で四十歳位の男が血を流して死んでいるのを通行人が発見、XX署に届け出た。男は腹部を鋭利な刃物で刺され、出血多量で死亡したものと推定される。被害者はホームレスと思われ、警察は身元の確認を急いでいる。

新聞の隅の方に出ているあまり大きくない記事だった。地方版に載ったにわとり事件の方がもっと大きかったと思う。

「さっきのナイフ、これに関係あるの？」

ぼくの頭はまだはっきりしていない。

「刑事さんの話によると、凶器がまだみつからないから、さっきのナイフの可能性はあるらしい。もちろん、違うかも知れないよ」

「殺されたのって、どんな人なんだろう」

『学者さん』の顔が頭を横切った。まさかそんな事ないよね。

もしかしてあの『教祖』かもしれない。

犯人は絶対『ブラック・マント』だ。ぼくは確信していた。

その夜、『ブラック・マント』が『学者さん』にナイフをふりおろそうとしている夢を見た。自分の叫び声で何回も目をさました。そのたびに、ぼくを心配そうにのぞきこんでいる母さんの顔があった。



第六章

月曜日に学校から帰ってくると、母さんがその日テレビや犬の飼い主仲間から仕入れた情報をぼくに話してくれた。そういうたぐいの話をいつもは決してぼくには教えてくれない母さんだけど、今回はぼくも多少関係あるからね。

「カンタが拾ったナイフね、やっぱり凶器だったらしいわ。血液型が一致したらしいの。警察から連絡があってね、ナイフを拾ったこと発表してないから自分でも言わないようにって」

「なんで？」

「もちろん、危険だからよ。犯人が何をするかわからないでしょう？」

「うん、誰にも話してないよ。雄二は休みだし、ほかにそんなこと話せるやついないから」

「雄二君、お休みだったの？ 珍しいわね」母さんが心配そうに言った。

「後でプリント届けに行ってくる。それより母さん、殺されたホームレスってどんな人だったの？」

ぼくは心臓がどきどきした。『学者さん』だったらどうしよう。

「テレビでは、大がらで、いつも黒い服に黒いマント着ていた人だって言ってたわ。名前はまだわからないらしいけどね」

「ブラック・マントだ！」思わず大声が出た。

「え？」母さんが聞き返した。

「ほら、前に土手のところで変な人に会ったって話したこと覚えてる？ 地下の商店街から移ってきたって姉さんが話してた人！ カンタをけとばしたホームレス！」

「そう言えば、そんなことあったわね」

「その人だよ、きっとそうだよ！」

じゃあ、『学者さん』は？ 『学者さん』はどこへ行ってしまったのだろうか？

だまりこんだぼくの前に、母さんがおやつ肉まんじゅうをおいてくれた。アツアツのそれを少しずつかじりながら、『ブラック・マント』と黒い傘のおじいさんの顔を思い浮かべた。

暗くならないうちに、ぼくは自転車に乗って雄二の家へプリントを届けに行った。

雄二は塾へ行っていて留守だった。

おばさんにプリントを渡して引き返した。

大変だなあ、学校は休んでも、塾は休めないんだ。

急に思いついて、自転車を商店街へ向けた。

そうだ、ゲームセンターへ寄ったらタブレット型のコンピュータも見たいな。ゲーセンに入るのは禁止されているけど、外からのぞくくらいはいいよね。

ゲーセンの前に自転車をとめた。

やってる、やってる。

うらやましいなあ、ぼくは家でテレビゲームだ。

あれ？ 雄二？

茶髪の中学生のそばにいるのは雄二？

まさかね。雄二は塾へ行っているはずだ。なんていったって真面目だから。

話している相手はぼくからは後ろ姿しか見えない。この間会った順一君に似ている。

外から見ているのはたいして面白くないので、すぐパソコンショップへまわることにした。ここには自由にさわれる機種がいくつかおいてあるから、とても楽しい。

ぼくが入っていくと、店長さんが「新しい機種を試してみる？」と言ってくれた。

やったね。すごくうれしい。

タブレットで色々試していると時間のたつのが速い。外はもうまっくらだ。ぼくはもう少し店にいたかったけど、やめにして自転車にまたがった。

「もう帰るのかい？ 早いね」店長さんが声をかけてきた。

「夕食の時間だから」

「ほー、めずらしいね」

「なんで？」ぼくは不思議に思った。

「いや、小学生はみんな塾でいそがしいらしいよ。よく十時頃ハンバーガーかじりながら帰っているのを見かけるから」

「ぼく、塾へは通っていないから」日曜テストには行くけど、と口の中でつぶやいた。

ハンバーガーか、いいな。フライドポテトも思いっきり食べてみたい。母さんはファーストフードに偏見があるから、めったに食べさせてもらえない。ぼくが肥満になるって言うんだ。

帰る途中、もう一度ゲーセンをのぞいてみたけど、もう雄二に似た子も茶髪の中学生もいなかった。

三日ほど休んだあと、雄二が朝、電話をしてきた。今日は学校へ一緒に行こうという。

雄二の顔色はぼくでも気がつくほど青白かった。

「風邪、まだ良くなってないんじゃない？」

「もう、直ったよ」雄二はむっとしたように答えた。

ぼくは夢中になって新しく出たパソコンの話をしたが、雄二はいつものようには興味を示さなかった。上の空で、ただ「うんうん」とうなずいているだけだ。まだ具合が悪いのかもしれない。

授業中も元気がなく、いつものように真っ先に手をあげることもなかった。

担任のゴリラも心配して「無理するんじゃないぞ、調子悪ければ早退しろ」と声をかけた。

「だいじょうぶです」と言って雄二は帰ろうとしない。食欲もなさそうなので、ぼくが二人分の給食をたいらげた。

放課後のんびりと帰り支度をしていると、雄二がそばにやってきた。

「あれ？ 急いで帰らなくていいの？」 ぼくは少しおどろいた。

「今日は、塾休むんだ」

「まだ、風邪が直ってないみたいだもんね」

「一緒に帰ろうよ」 雄二の方からさそってきた。

ぼく達は久しぶりに帰り道を一緒に歩いた。今度は新しいゲームソフトの話をした。それにも雄二はのってこなかった。

「どうしたの？ なんか変だよ」

雄二はそれには答えない。

「今日、これから時間あいてる？」 沈んだ声だった。

ぼくはいつだってひまさ。でも「うん」とだけ答えた。

「カンタを連れて散歩にいかないか？」

「カンタを？ 君のところのリュウは？」

雄二の家は大きくて、広い庭もある。リュウの小屋も金網で広く囲ってあって、リュウがある程度自由に歩き回れるようになっている。

「リュウはぼくではだめだ、順一兄さんでないと」

「そうだね、大きいもんね」

「あれは順一兄さんの犬だから……。鞆を家においたら、君んちに行くから」

「うん、待ってる」

途中で雄二と別れて家に帰った。ドアを開けるとカンタがとびついてきた。「だめだよ、カンタ！ おすわり！」 ぼくはきびしく言った。カンタは大きくなってきたから、人にとびつかせてはいけないんだ。

「ただいまー」

「お帰り。おやつあるわよ」 母さんがキッチンから顔を出した。

「雄二が来るから、それからでいいよ」

「あらそう、ひさしぶりね。雄二君、風邪なおったの？」

「うん、でも塾は休むんだって。一緒にカンタの散歩に行ってくるよ」

「カンタもよろこぶわよ」

母さんが二人分のおやつを用意していると、玄関のチャイムがなった。

「雄二だ！」

ぼくとカンタは玄関に急いだ。カンタは雄二の顔をなめまわして歓迎している。雄二もいやがったりはしない。甘いものがきらいなぼくのために、テーブルにはサンドイッチがおかれていた。

「これがおやつなの？」 やせっぽちで小食の雄二はびっくりしている。

「この子は良く食べるから、普通のおやつじゃたりないのよ」 母さんはそう言って笑った。

カンタを連れて、二人で住宅街の公園へむかった。あの事件以来、土手の方へはしばらく行ってはいけないと父さんに言われている。

雄二がリードを持ち、カンタはおとなしく従っている。家族の誰かが一緒にいれば、カンタは他人にリードを持たれても平気だ。

ぼく達はだれもない公園のブランコにすわり、カンタは少し離れた場所に寝そべった。

「なにかあった？」

いつもと違う雄二の様子が気になって聞いてみた。雄二は地面を見つめたまま返事をしない。ぼくは仕方なくブランコにぼんやりと座っていた。

「ここの池でアヒルが殺されたんだよね」雄二が突然つぶやいた。

「そうだよ、みんな首を折られたんだ。ひどい事するよね」ぼくは身ぶるいをした。

「うん、ひどいよね」雄二はまだ地面を見つめたままだ。

「もしかすると……」聞き取れないような声だ。

「うん？ もしかすると何？」ぼくは問い返した。

「もしかすると、犯人は兄さんかも知れない」

思わず雄二の顔を見た。雄二は泣きそうだった。

「どうしてそう思うの？」ぼくはおどろいて聞いた。

「学校のにわとりが犬に殺された時、兄さんが夜リュウを連れてでかけるのを見たんだ」

雄二はぼそぼそと話し始めた。

第七章

「事件のあった日、ぼくは塾の宿題がたくさんあったから、おそくまで勉強していて、兄さんが帰ってきたのも知っていた。深夜だったけど、その時は不思議に思わなかったんだ。いつものことだから」

「君の兄さん、夜、よく出かけているものね」ぼくは間の抜けた返事をした。こういう時、ぼくは何を言ったらいいのか良く分らない。

「次の日、学校で犬がにわとり小屋に入ったって聞いて……」

「順一君と思った？」

「うん、もしかしたら兄さんじゃないかと」雄二は目に涙をためていた。

「偶然だよ」ぼくはそんな事があるはずないと思っていた。

「その前の日もきげんが悪くて、一日中出かけてたみたいだし、帰ってきた時兄さんもリュウも泥だらけだったんだ。あれはアヒルの事件があった日だと思う」

「それだけではわからないよ。それにリュウはそんな事をする犬じゃないだろ」

ぼくはリュウの利口そうな顔を思い浮かべた。

「ぼくもそう思うけど、リュウは兄さんの命令は何でも聞くから」雄二は不安そうだ。

「だからこの間、思いきって兄さんに聞いてみた」

「ゲーセンで？」

「どうして知ってるの？」雄二はびっくりしたようにぼくの顔を見た。

「知ってたわけじゃないよ。ぼくが外からゲーセンをのぞいた時、君に似てる子がいて、もしかやと思っただけだよ。一緒にいたのが順一君でしょう？ 中学生になって変わったけど」

「うん。兄さん中学に入ってすぐ髪の色染めたんだ」

「ふーん」

「それで兄さんに、この前の夜リュウを連れてどこへ行ったのか聞いてみた」

「何て言ってた？」

「いつのことかって聞くから、学校でにわたりの殺された日って言ったんだ」

「そしたら？」

「おれを疑ってんのか？ お前はよけいなことに首をつっこまなくて、勉強してりゃいいんだ。そうすりゃ親父やおふくろがかわいがってくれるさ、って……」

「でもさ、何でいまごろ気になったの？ もう、ひと月も前のことだよ」

雄二はまた、じっと地面をみつめた。涙がぼたっと落ちた。雄二が口を開くまでぼくはただ黙ってブランコをゆらしていた。

「ホームレスが殺された日、あの日も兄さん夜中いなかった……」

「え？」

「兄さん、昨日新聞にでていたのと同じナイフ持ってるんだ。ずっと前、ぼくにみせびらかして『いいだろー』って言っていたから知っている」

「考えすぎだよ」

あのナイフはカンタがみつけたんだと、口まで出かかって飲みこんだ。

「どうしよう、兄さんが犯人だったら」雄二の顔は青くなっていた。

「お父さんかお母さんに話したの？」

「まさか！ 君も絶対言わないでよ」

「もちろんだよ。でもさ、ゴリラに相談してみたら？ 君、ゴリラにうけがいいから」

「だめだよ、とんでもないよ。ゴリラに知られたらおしまいだ」

「どうして？」ぼくはますますびっくりした。

「あいつ、すぐ警察にチクルよ」雄二がそんなことばを使うなんて初めて聞く。

「そんなことないと思うよ、先生だもの。それにきみはゴリラのお気に入りだから」

「ぼくが？ まさか！」

「だって、成績いいし、優等生じゃないか」

「ぼくはゴリラににらまれているもの」

「まさか！」こんどはぼくが叫んだ。

「ほんとだよ、ぼくを見る目つきでわかるんだ」

そうかなあ。先生にかわいがられたことも、にらまれたこともないぼくには理解できない。

どちらにしても、ぼくにできることは何もない。

「もし、兄さんが犯人だったら、ぼくの家どうなるんだろう」雄二がぽつっと言った。

「だいじょうぶだよ」と答えたものの、ぼくにはわからなかった。

「君はいいな、カンタがいて」雄二はカンタの頭をなでながらつぶやいた。

「君にだってリュウがいるじゃないか」

「リュウは兄さんの犬だ」雄二には珍しく強い調子の言い方だった。

「そんなのおかしいよ。犬はだれのものでもない、家族の一員だって母さんが言っている」

「そうかもしれないけど、リュウは兄さんが小学生の時、獣医さんに紹介してもらって買ったんだ。ぼくはまだ小さかったし、いじめられていた兄さんのために飼うことにしたと、ママが言っていた。だからリュウは兄さんの犬なんだ」

「いじめられていたの？ 君の兄さん」

「小学生の時だよ」

「リュウは君を自分よりランクが下だと思っているんだね」

「そうなのかな。リュウがパパと兄さんの命令しかきかないのは、そのせいかも知れない」

記憶にある雄二の兄さんはいつもリュウと一緒にだ。自転車を走らせながらリュウを散歩させている姿を、ぼくはいつもうらやましいと思っていた。順一君とリュウはぼくの小さい頃からのあこがれだった。

そろそろ暗くなってきた。

カンタは足元で寝ている。公園には誰もいない。

雄二とぼくは、しばらくの間黙ったままブランコをゆらしていた。

だれか大人に相談したい。ぼくはこの時程、そう思った事はなかった。

次の日、雄二は学校に来なかった。その次の日も。

ぼくが家までプリントを届けに行っても、姿をみせることはなかった。

「いつもありがとう。雄二ね、部屋に閉じこもったまま出てこないのよ」雄二のお母さんが心配そうに言った。

「学校で何かあったのかしら、聞いていない？ 塾にも行こうとしないの」

「別に何も聞いていません」ぼくはそう答えるしかない。

金曜日の放課後、家にだれもいないのを確かめて、雄二のケイタイに電話を入れた。ぼくは携帯電話を持っていない。

「小学生には必要ありません」母さんのひとことで、ぼくの要求は却下された。こういう時に必要なんだけど、母さんに理解させるのは不可能だ。

だれも帰って来ないようにといのりながら居間の電話を使った。雄二は家庭との連絡用にケイタイを持たされている。

「はい」元気がない声が聞こえた。

「雄二？ 学校に来ないから心配してたよ」

「……」

「君の家にこれから行ってもいい？」

「……」

「行くからね！」ぼくは一方的に言うと言話を切った。

自転車をとばして、雄二の家へ向かった。チャイムをならすと、雄二のお母さんがドアを開けてくれた。

「よく来てくれたわね。雄二は自分の部屋にいるから」

雄二のお母さんはぼくの母さんと違って、いつもとてもきれいなのに、きょうは何だか疲れているようだ。めずらしく、髪の毛もぼさぼさだった。

ぼくは階段を上って雄二の部屋へ向かった。

「はいつでもいい？」

「……」

返事はない。

ドアをそっと開けてみた。部屋のカーテンは閉めてあって、電気もつけていない。雄二はふとんをかぶってベッドの中にいた。

「どうしたんだよ、いったい」

「君になんか、わかんないよ」

そう、ぼくには全然わからなかった。

雄二はぼくに背中を見せて壁の方をむいていた。泣いているようだった。どうしたらいいんだろう。ぼくはだまって、雄二が泣き止むのを待っていた。

「君、本当に順一君がやったと思っている？ ぼくはそう思わないけどな。リュウはかしこい犬だし、君のお兄さんがそんな事するわけないよ」

「……」

「明日は学校へ行こうよ」ぼくはさそってみた。

「……それだけじゃないんだ」雄二がつぶやいた。

「え？」

「学校へ行きたくないのはそれだけじゃない」

「他に何かあるの？」

「ゴリラがこわい」

「ゴリラが？ どうして？」

「あいつ、ぼくにいやみばかり言うんだ。塾の成績はいいかとか、有名校うけるんだらうとか」

「それがどうしていやみなんだ？」

「言い方と、目つきがいやらしいんだ。ぼくの成績知ってる？ テストは全部百点だけど、成績表ではひとつ落とされるのもあるんだ。授業に協力的でないって」

「ほんとか？ 他にも受験するやつ多いのに。クラスの半分以上だよ。でもさ、一つくらい落とされたって、もともと成績良いんだからかまわないじゃないか」

「そういうわけにはいかないよ」

「ふーん」

母さんは自分の経験から小学校の成績なんて当てにならないって言ってる。小学校の時トップクラスだったんだって。中学、高校とだんだん成績が下がっていったそう。今ではどうでも良い事だと言ってるけどね。どっちにしてもぼくにはよくわからない。

雄二にくらべれば、ぼくの成績なんてひどいもんだ。算数と体育はいいけど、あとはみんな普通。いや、国語と家庭科は普通以下だ。でもさ、点数から言ったら家庭科なんて最低だけど、それでも普通以下程度でおさまっている。

ゴリラは雄二の言う程意地悪じゃないとぼくは思う。それにゴリラは良い先生だと母さんはいつも話している。

「でも、こんなふうにならなくてもしょうがないじゃん？ 明日は迎えに来るから、一緒に行こうよ。土曜日だから半日だし」

雄二は黙ったままだった。

第八章

次の日、いやがる雄二をむりやり学校へひっぱって行った。何しろ雄二の背の高さはぼくの肩あたりまでしかなくて、しかもやせっぽちだ。それに比べるとぼくは年の割に大柄だ。雄二も本当は学校へ行く気にはなっていたのだと思う。

ゴリラは雄二を見ても何も言わなかった。なんだかゴリラも元気がないようだ。

学校の帰り道、ぼく達はなんとなく遠回りをして放送局の方へ歩いて行った。駐車場への階段の所に見なれた黒い傘があった。

「学者さん？」ぼくは思わず声を出した。

「どうしたの？」雄二がふしぎそうにぼくの顔をのぞきこんだ。

「前に話した事あるだろう？ いなくなったホームレスのおじいさん」

「また、もどってきたのかな」雄二がささやいた。

「うん、行ってみよう」ぼく達は一緒に駆け出した。

『学者さん』は以前のように寝そべて本を読んでいた。あいかわらず、黒い傘が開いておいてある。

「こんにちは」ぼくは声をかけた。

「カンタ君だね？」

カンタ君ではないが答えた。

「しばらくいなかったから、心配していたんです」

「それはありがとう」

「おじいさんはこわくないの？」

「何がだね？」不思議そうな顔でぼくを見た。

「だって、公園で人が殺されたでしょう？」

「ああ、あれね」『学者さん』は軽く答えた。

ぼくはひょうしぬけしてしまった。

「いままで公園の中にいたんですか？」

そんなはずはないと思いながらも、聞いてみた。

「いいや、家に連れもどされていた。また逃げてきたんだよ」

「家にいるのがいやなの？」ぼくには理解できない。

「そういうわけじゃないけどね、ちょっと窮屈なんだよ」

「同じ所にいると、またみつっちゃうよ」雄二が心配そうに口をはさんだ。

「あはは、だいじょうぶだよ。家族もきっとあきらめてるよ」

『学者さん』はおかしそうに笑った。

「君、今日は犬と一緒にじゃないのかい？」

「うん、学校の帰りだから」

「そっちの子も、犬を飼っているのかな？」『学者さん』は雄二に顔をむけた。

「ぼくの兄さんがシェパードを飼ってるんだ」雄二が答えた。

「シェパード？　もしかしてリュウかい？」

「知ってるの？」

「このあたりではシェパードは少ないからね。ああ、あれは君のお兄さんか。何年も前から知ってるよ。よくここを通るからね」

そうか、ぼくが散歩するようになったのはカンタが来てからだから、まだ四ヶ月ほどだ。順一君は何年も前から、ここをよく散歩させているに違いない。

雄二は地面をみながら、何かを考えていた様子だったが、急に顔をあげると、思いきったように『学者さん』に話し始めた。

「ぼくの兄さんよく知っているの？　だったら教えて。兄さん、乱暴じゃない？　ナイフ振り回したりしない？」

「どうしてそんな事聞くんだい？」『学者さん』は別におどろいたふうでもなく聞き返した。

「だって……」

雄二はぼくに助けを求めるように、こっちを向いた。

「この頃、いろいろ事件があつて。アヒルが殺されたり、にわとり小屋に犬が入れられたり」ぼくが代わりに説明をはじめた。

「おまけに公園で人が殺されたりして」

「お兄さんが関係していると思ってるのかい？」『学者さん』は静かに聞いた。

「……」雄二は下を向いて黙っている。

「それは、考え違いだよ。君のお兄さんはそんな事はしない」

「……」

「どうしてそんな事がわかるのかっていう顔をしているね」

『学者さん』の声はとても穏やかだ。

「それはね、私はここにもう四年もいて、君のお兄さんがまだ小学校の頃から、よく知っているからだよ」

『学者さん』はそれから順一君と知り合ったいきさつを話してくれた。ぼく達は、話を聞くために駐車場へ降りて行く階段に腰をおろした。平日はここを使って駐車場へ行く人はめったにいないから、邪魔にはならない。

「私が君のお兄さん、順一君とはじめて会ったのは、公園の水飲み場のところだった。一生懸命泥だらけの体操服を洗っていた。二回目も同じ場所で会ったよ。その時は、靴を洗っていた。三回目の時にはさすがに気になって、どうしたのかと聞いたのだが、首を横にふるだけで、何も答えなかった」

そこで息をきると、『学者さん』は思い出そうとするかのように、遠くを見つめた。

「そのうち洋服が破れていたり、はだしで歩いているのを見かけたりしたから、いじめがひどくなっているのが見てとれた。表情もだんだん暗くなって、内心とても心配していた。私の孫も学校でいじめられた事があって、よくわかるんだよ」

『学者さん』はしばらく黙ったあと、ゆっくりと話を続けた。

「ある時、はっきりとナイフで切られたあとのある鞆を見た時、たまらなくなつて声をかけたんだ。私にもいじめられている孫がいると話して、自分の両親に相談するよう言い聞かせた。子供を守るのは親のつとめだと私は思うからね」雄二は神妙に聞いている。

「彼は多分両親に話したんだね。しばらくすると、子犬を連れて散歩に来るようになった。リュウだね。誕生日のプレゼントに両親が買ってくれたと言っていた」

「うん、パパが言ってた、兄さんのために買ったんだって」雄二は少し不満そうだ。

「リュウはどんどん大きくなり、順一君も中学生になったが、会えば必ずあいさつをしてくれるし、私達のようなホームレスに石を投げたり、けとばしたりする少年たちを注意してくれるようにもなった。いつもそばにリュウが忠実な家来のように控えていたから、みんなこわがって逃げて行ったものだ」

そこで『学者さん』は、また雄二を見た。雄二はもう下を向いていなかった。まっすぐに『学者さん』の目を見ている。

「君の兄さんはやさしい子だ。そんな子が、アヒルを殺したりするわけがない。今はまだリュウの力を借りているけれど、そのうち一人で立派にやっていると私は思っているよ」

『学者さん』の話を聞いた後、雄二は少し落ち着いたようだった。でも、心配がなくなったわけではないらしい。あいかわらず浮かない顔をしている。

日がたつにつれて少し元気を取り戻した雄二は、塾へもまた通いはじめた。ぼくと遊ぶ時間はなくなってしまったけどね。

それにひきかえ、ゴリラは見るからに沈んだ様子で、自習の時間も多くなった。青い顔をして職員室と教室を行ったり来たりしている。特に体の具合が悪い訳でもなさそうだ。

頑丈なゴリラが風邪ひくわけもないし。

ぼくはといえば、いつもと同じに土曜と日曜はカンタの散歩に出かけている。犯人がつかまっていないので、土手の方へはまだ行っていない

第九章

季節も寒くなって、そろそろカンタの予防接種の時期になった。この間病気をしたから、検診もかねて岩本先生の所へ連れて行く事になった。もう、ぼく一人でも充分だ。

「由美と一緒にじゃなくて平気？」と母さんに聞かれたけど、この前の病気の時だってぼくが一人で頑張ったんだからね。

動物病院のドアを開けると、中から飛び出してきた順一君とぶつかりそうになった。ぼくはよけようとして壁にへばりついた。順一君はけわしい顔をしている。ぼくの横を駆け抜けて、すぐ見えなくなった。ぼくがいることさえ気がつかないようだ。

「大丈夫かい？ ぶつからなかったか？」

岩本先生が診療室から顔を出した。

「雄二のお兄さん、どうかしたの？」

「うん、まあね」

先生は言葉をにごした。

「それより、今日はどうしたんだい？」

「そろそろ予防接種の時期だし、この間病気したから検診もお願いします」

母さんに言われたようにぼくは復唱した。

「そうだね、そんな時期だったね」

カルテを見ながら先生はうなずいている。

ぼくと先生でカンタを診察台にのせた。前よりかなり重く感じた。体重計をみるとかなり増えている。もう23キロだ。成犬で29キロから34キロだから、少し太り過ぎかも知れない。

「もう少し運動させた方がいいね」

先生はガラスの体温計をカンタのお尻に入れて体温を計り、おなかを診察した。顕微鏡で検査をしたあと断言した。「元気そうだから、注射をしても大丈夫だ」

（おい、カンタ、注射だぞ。泣くなよ）ぼくは心の中で励ました。

先生はカンタの首のあたりの皮を持ち上げると素早く針をさした。カンタは何ごともなかったかのように座っている。

「注射、痛くないの？」

実はぼくもこの間注射を打ったばかりだ。破傷風とジフテリアの二種混合という予防接種だ。ほんの少しの量だったけれど、やたら痛かった。注射のあとも少し腫れたし。この年齢になっても、病院で逃げ回る子もいるそうだ。さすがにぼくは恥ずかしくてそんな事はできない。

「犬は痛くないようだよ。人間とは違うからね。春になったら狂犬病の予防注射があるけど、それまでは来なくていいよ」

カンタが全快したのはうれしいけれど、ここへ来れなくなるのはちょっと残念だ。

ぼくとカンタの生活はすっかり元に戻っていた。

公園の事件も殆ど思い出さない。そんなある日、たまたま見たテレビの動物番組に、ぼくはショックを受けた。

次の日、ブルーな気分でコンビニへ買い物に行くと、岩本先生に出会った。

「先生もコンビニなんかに来るの？」

「そりゃそうさ。便利だからね」

「あのね、テレビで見たんだけど……」ぼくは言いよどんだ。

「テレビかい？ 君たちの年頃は何を見るんだろうな」

「昨日は捨て犬の話、放送してたよ」

「捨て犬？」

「飼い主に置き去りにされた犬の話」

「ほうー。それで？」

「保健所に捕まえられた犬はどうなるの？」

岩本先生はじっとぼくを見た。「そうだな、ここでは何だから病院においで。ゆっくり話してあげよう」

「行ってもいいの？ 診療中じゃないの？」

「今日は休診日だから誰もこないはずだ」

先生はそう言うと先に立って歩き始めた。

病院の入り口は閉っていた。先生に案内されてぼくは裏口へまわった。そこは表からは見えないけど、ごく普通の玄関だ。

靴を脱いでいると「こっちへおいで」と先生が手招きをしている。

先生の書斎らしい部屋へ通された。あらゆる所に本棚があって、机の上にも本や雑誌が山積みになっている。壁には所々に猫や犬の写真が飾ってあった。

「そのへんに座って」先生はあいている椅子を指さした。

「ちょっと待っててね」

壁にかかっている写真の動物達は、とてもかなしそうな表情をしているように思えた。

何故だろう？

やがて先生がペットボトルを二本持って入ってきた。

「のどが渴いたね。君もどう？ ウーロン茶だけどいいかな？」

そういいながら一本ぼくに渡してくれた。先生をみならって、ふたを開けるとそのまま一口飲んだ。

「どんなテレビだったんだ？ もう少しくわしく教えてくれないかな」

ぼくは昨日の番組をできるだけ忠実に話した。

「保健所へはたくさんの犬や猫が持ち込まれている。産まれたばかりの子猫や子犬も多いよ。人間の無責任から産まれた命だね。保健所では引き取り手がなければ、数日間のうちに処分してしまう」

「処分だなんて！ 子猫や子犬も？」ぼくは憤慨した。

「いつまでも子猫や子犬ではいられない。すぐ大きくなってしまおうよ」

そうだ、カンタだってあつという間に大きくなった。

「それじゃ、まるで死ぬために産まれてきたようだね……」産まれてこない方が幸せだったかも知れない、ぼくはそう思う。

「責任を持ってないのだったら、かわいそうな命を作らないためにも、産ませるべきではないよ。そのための手術もあるんだから」

ぼくはしばらく壁にかかっている写真を見ていた。その視線に気がついたのか、岩本先生は一枚のシベリアンハスキーの写真を指さした。

「悲しそうな眼をしているだろう？」

そう言うと先生は立ち上がって、写真をじっと見た。

「昔シベリアンハスキーがはやった時代が一時期あってね、だれもかれもがハスキーを飼いたがった。かなり大きくなる犬だから、しだいに家庭でもてあますようになり、流行はあつという間に終わってしまった」そこで、先生はお茶を一口飲んだ。

「流行は終わっても、犬は残っている。もちろん可愛がっている飼い主もたくさんいるが、中には身勝手な人間もいて、もてあました犬を保健所へ持ち込む人もいるんだよ。ゴールデン・レトリバーも同じ運命をたどっている」

「あの犬も？」ぼくは壁の写真を見上げた。

「そうだ、あれは保健所で撮った写真だ。そのころは他にも多くのハスキーが収容されていた。自分の運命がわかるのか、みんな悲しそうな眼をしている。もとの飼い主に見せてやりたいね」

本棚から一冊のアルバムを出すとぼくに見せてくれた。

「君たちのような子供達にも実態を知ってもらいたいと思って、写真を撮っているんだよ」

アルバムはおりの中に収容されている犬や猫の写真で一杯だ。あきらめたように床に寝そべっている犬。カメラに向かって歯をむき出している犬。訴えるような眼をしてこちらを見ている猫……。

ここに写っている動物達はもうこの世にはいない。そう考えるとぼくは胸が締め付けられるような気持ちだ。

「この間順一君にも見せたんだが、彼はショックを受けたらしくて、飛び出して行ってしまったよ」

「ぼくと入り口でぶつかりそうになった時？」あの時の順一君のけわしい顔が浮かんできた。

「そうそう、そんな事があったね。彼はとてもデリケートだから耐えられなかったのかも知れない」

「先生は順一君の事よく知っているの？」

「ご両親に相談されて、リュウを紹介したのは僕だからね。良く知っているよ」

「リュウは賢い犬だよね？」

「もちろんさ、何しろ僕が選んだ犬だから」 先生は笑いながら胸を張った。

「リュウはアヒルやにわとりを襲ったりしないよね？」

「いったい何を考えているんだい？」

ぼくの突然の質問に先生はとまどったようだ。

「何を誤解したのか知らないが、リュウは立派に訓練を受けた犬だ。命令されない限り、何も襲ったりはしない」

「命令されたら？」 ぼくは食い下がった。

「どうかしたのかい？ 変な事を聞くね」

ぼくは雄二の代わりに聞いているつもりだけど、先生にはわからないよね。

「雄二が順一君が動物を襲っている犯人だと疑っているみたいだから、先生にも聞いてみようかと思って……」

ぼくはしどろもどろになって説明した。

先生は大笑いをした。

「順一君は動物がとても好きな子だ。小さい時から何回ここへ傷ついた動物や鳥を運んできたことか、数えきれないほどだ。そのたびに僕は無料奉仕をさせられているよ」

先生はまたアハハと笑った。



第十章

その夜遅く、電話がなった。

母さんがぼくを呼んでいる。

「雄二君からよ。どうしたのかしら、こんなに遅く」

時計は10時半をさしていた。雄二がささやくような声で「今、出られる？」と聞いている。

「どうしたんだよ」ぼくも、母さんに聞かれないように小さな声で話した。

「兄さんがリュウを連れてでかけた。ぼく、後をつけているんだ」

「なんだって？ 今、ひとりなの？」

「うん、ちょっとこわくて電話したんだ」雄二の声はいかにも心細そうだ。

「カンタも一緒に連れて、すぐ行く」

「兄さんは君の家の前を通って、公園の方へ行くみたいだよ」

「ぼくの家の前で待ってろよ」

電話を切ると、カンタを呼んでリードをつけた。

「待ちなさい！ こんな時間にどこへ行くの？」

母さんが大きな声で叫んだ。ぼくはジャンパーをひっかけると、つかまらないうちに急いで家をでた。家の前で雄二が待っていた。

「順一君は？」雄二と全速力で走りながらぼくは聞いた。

ぼくの足に母さんが追いつけるはずがない。

カンタも喜んで走っている。

「公園の方へ歩いて行った」雄二はもう息をきらしている。

「こんなに暗いと、ひとりじゃこわくて。カンタと一緒にだと心強いよね」

雄二はそう言ってくれるけれど、リュウと一緒にならね、カンタじゃちょっと不安だ。

公園への道は静まりかえっていて、人通りもない。ぼく達は運動靴だから歩く音はしない。順一君に気付かれる心配はないと思う、カンタさえ大人しくしていれば。

ぼく達は声をひそめて話した。

「あのおじいさん、ああ言ったけど、兄さんはどこへ何をしに行くんだろう」

「そのうちわかるさ」ぼくは順一君を信じていたけど、やはり不安だった。

「君もよく家をでられたね」

雄二が家を出てこられたなんて奇跡的だ。

「ママはぼくがこの前みたいに、部屋でふとんかぶって寝ていると思ってるよ。だから二階の窓からでたんだ」

「やるなあ、君も」

「ぼく、けっこう身軽だよ。君ほどじゃないけど」

ぼくは体型ににあわず、身軽さ。体育は得意だ。

ふと、後ろから速足で歩いてくる足音に気がついた。

確かに人の足音だ。駆け足ではないが、かなりの急ぎ足だ。

カンタが振り返った。そっちへ向かって走ろうとする。

ぼくは雄二の腕をつかむと、リードをひっぱって走り出した。

「誰か来る！」

ぼく達が走り出すと、その足音も走り出した。二人で必死になって走った。

順一君どころではない。

足音はどんどん近付いてくる。

カンタは後ろを振り向いては、そっちへ行こうとリードをひっぱる。広場の入り口でとうとう追い付かれた。二人ともえり首を、ぎゅっとつかまれた。

「何をしているんだ、お前達」

父さんだった。ぼく達は気が抜けてその場にしゃがみこんだ。

その時、遠くで犬の吠える声がした。続いて叫び声！

父さんはカンタのリードを外した。カンタは一目散に声の聞こえた方角へ走って行く。

ぼく達三人もカンタに続いて走った。カンタはすぐに真っ黒い公園の中に消えた。ぼく達も後を追った。父さんが一緒だからこわくない。それに月も出ているし。

公園の中心まで来た時、もみあう2、3人の人影とののしり声、低くうなる犬の声、カンタの吠える声とが一緒になってあたりにひびき渡っていた。

「お前達はここにいなさい。動くんじゃないよ」父さんはぼくに携帯電話を渡すと、警察に連絡するようにと言って、人影に近づいて行った。

ぼく達は茂みの陰にしゃがんで110番をかけ、事情を説明した。

それから息をひそめてじっとしていた。父さんは強いけど相手はナイフを持っているし、とても心配だ。

「あそこにいるのは兄さんだと思う？」雄二がぼくの耳にささやいた。

「リュウはいるみたいだね。他にも何人かいる」

カンタが人影にとびついたようだ。月明かりにナイフが光るのが見えた。

「カンタ、あぶない！」

キャンキャンというカンタのなきごえと共に、ドスンと何かが倒れる音がした。続いてリュウのうなり声と、「やめてくれ」という悲鳴。

「だいじょうぶか？」父さんの声。

「ええ、それより、こっちのじいさんのほうが」順一君の心配そうな声がする。

うずくまっているぼく達の耳に、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。



ぼくの家には、雄二のお母さんが待っていた。雄二を見てほっとしたのか、泣き出してしまった。

それから母さんに一時間も叱られるはめになった。雄二のお父さんは順一君につきそって警察にいる。

ぼくのお父さんは、ぼく達を家に送り届けると警察に行った。

今夜、雄二はぼくの部屋に泊まる事になった。

ぼく達は疲れ切っていたけど、興奮したせいかベッドに入っても、なかなか寝つけなかった。事件がどうなったのか、二人とも気になっていた。

それでもいつか眠ってしまったようだ。

日曜日、ぼく達が目をさましたのは、もうお昼頃だった。階下におりていくと、父さん、母さん姉さんで昼食をとっていた。

「おう、起きたか」父さんがぼく達に笑いかけた。

「顔を洗っていらっしゃい、今ごはんにしてあげるから。お腹すいたでしょう」

母さんは早速ソーセージを焼きはじめた。

「きのうは大活躍だったんだって？」

姉さんもいやに優しい。

お昼ご飯を、雄二と一緒にたらふくたいらげた後、父さんが事件の説明をしてくれた。

後から知った事も入っているけどね。

父さんがカンタに追い付いた時、ちょうどリュウが順一さんと『学者さん』を守って、うなり声をあげている所だった。

「ナイフを捨てろ！」と、父さんが叫んだ時、カンタがナイフを持った男に飛びかかった。

でも、ふり払われて逆に地面にたたきつけられたようだ。

なんだか情けない。

順一君の「行け！」という命令でリュウが男に飛びかかり、腕にかみついた。ふだんはおとなしいリュウだけど、さすがだ。

「助けてくれ！」男は悲鳴をあげた。

父さんはもう一人の男の腕をつかみ、投げ飛ばしたようだ。

そこへパトカーが到着して犯人達は警察へ連れて行かれた。まだ16-7才の高校2年生三人だった。

警察の調べによると、三人は公園をなわばりにして、ホームレスを汚いからと殴ったり、青いビニールテントをこわしたりしてストレスを発散させていたようだ。

『ブラック・マント』はホームレスをおそっている少年達を逆に脅して、しょっちゅうお金をまき上げていたらしい。公園で寝ている『ブラック・マント』を見つけた少年達は良いチャンスと刺し殺したのだと言う。

「これ以上まきあげられるのはごめんだ。そう思ったんです」

犯人達はそう供述していると警察の人が話してくれた。昨日は、むしゃくしゃするので、ホームレスを殴れば気が晴れるかも知れないと、夜に公園にもぐりこみ、弱そうなホームレスを探していたらしい。

たまたま木の陰で寝ていた『学者さん』をおそったところ、リュウと父さんに取り押さえられたというわけだ。

順一君とリュウがそこにいた理由は、もどってきた『学者さん』が心配で、みまわりにいたからなんだって。

それまでも『学者さん』がいる間は、毎日公園に行っていたようだ。雨上がりに、リュウとこころげまわって遊んだ後に泥だらけになって、家で洗っている所を雄二に見られて怪しまれたんだね。

雄二は順一君をほんの少しの間でも疑った事を後悔している。

『学者さん』のけがは、幸いたいしたことはなかった。でも、家族の人がかけつけてきたそうだから、また家に連れもどされるだろうな。

「窮屈でね」と言った『学者さん』の言葉が耳に残っている。

犯人は、アヒルを殺した事は認めたけど、にわとり小屋に犬を放した事は否定している。警察も別人の線で調べているようだ。

カンタの事もつけ加えておこう。犯人にとびかかったものの、ふり落とされて地面にたたきつけられたカンタの傷は軽かったようだ。自分で歩こうとせずに、父さんにかつがれて帰ってきた時は、母さんも姉さんも、ずいぶんと心配したらしい。

次の日あわてて岩本先生に連れて行ったところ、「たいしたことありません、消毒でもしておけばだいじょうぶですよ」と言われた。

二人に「なんておおげさな子なの」すっかり株を下げてしまった。

リュウは表彰されるだろう。カンタだってナイフを発見したんだから、ほめられてもいいと、ぼくは思うんだけど。

その日の夕食はぼくの大好きなステーキだった。もちろんカンタも特大の肉をもらったさ。



スリリングな週末が終って学校へ来てみると、ゴリラのかわりに、副担任の女の先生が教室にいた。

「担任の先生はお休みです。今日は私が授業を受け持ちます」ときんきん声で言った。

ゴリラでも病気になることがあるのだと、変に感心した。

その週、ゴリラは出てこなかった。

何かあったんだろうか。

やがてゴリラはやめたといううわさが広がり、それを裏付けるように、次の週、副担任の女の先生が宣言した。

「今日から私が担任です」

え？ ゴリラは一体どうしたんだ？

何もわからないまま、日が経っていった。保護者会なるもので、父母にはゴリラが一身上の都合でやめたと説明があったそうだ。

一身上の都合ってなんだろう？

雄二はすっかり元気になった。今度の先生とはうまくやっているようだ。雄二の勉強に対する熱意を認めてくれているらしい。

ぼくは関係ない、ゴリラでも今度の若い先生でも。

やがてどこからともなく、ゴリラがやめた理由が伝わってきた。にわとり小屋の犯人は、ゴリラの中学生の息子だったのだ。ゴリラに反発していた息子が、父親を困らせようと思ってボクサーを小屋の中で放したらしい。責任をとって、ゴリラは学校をやめた。ぼくはなんだか、ゴリラがとても気の毒に思えた。

ゴリラの飼っていたボクサーはどうなるんだろう。ぼくの心臓がチクッと痛んだ。

「たぶん、訓練所で調教し直される事になるだろうよ」父さんはそう言っていた。そうなってほしい。

公園はあいかわらず犬仲間でにぎわっている。ポメラニアンのスーちゃんは、大きい犬の間を走り回っている。カンタが踏みつけやしないかとぼくはハラハラしている。

ホームレスも多くなった。知らない間に『教祖』も定位置にもどってきていた。

佳織さんのカンタを見る目も変わったと思う。

「カンタくんはお利口さんなのね。勇気もあるし」そう言いながらカンタの頭をなでた。

チェリーのカンタに対する評価は変わっていないようだ。カンタがそばに寄ると、いつものように歯をむきだして「フーッ」とうなった。

終わり